

ことになったものです。しかし、戦後は古本として残存が少く稀少価値を生じ、揃い物の入手は久しく至難となっていました。昭和50年仙台宝文堂から復刻版が発行されたので、ようやく入手できるようになりました。

注(1) 郷土史研究家佐藤興二郎・阿刀田令造・小倉博・鈴木雨香・今泉篁洲等がリーダーとなって組織したもので、事務所を宮城県図書館内に置いた。仙台叢書の刊行資金としては、斎藤報恩会から、旧仙台藩史料編纂の名目で13,750円の学術補助を受けた。叢書の頒布は予約会員制度をとった。会員数は当初千名程だったが、完結時には7百余名に減ったという。

なお、これとは全く関係がないが、国分町の書店伊勢安の伊勢斎助が仙台叢書刊行会の名目で郷土資料を出版した事実がある。明治26年7月7日「仙台叢書封内風土記」5冊本を発行している。伊勢斎助は自ら仙台叢書居士と称し、郷土ものの出版、特に林子平・斎藤竹堂・支倉常長の伝記や著書の刊行に努める一方、市井の研究者としても知られ、佐久間洞巖の「奥羽観蹟聞老志」の補遺を著した。昭和19年3月19日、87才で歿、弓の町大安寺に葬る。墓碑には小西皆雲の画、自筆の梅の歌と中林梧竹書「仙台叢書居士」と刻んである。

資料 本食い蟲五拾年（常盤雄五郎）

8. 養賢堂版について

問 呉趨顔麗荘・朱翠峯・華安愚同輯「韻府一隅」文化甲戌繅刻養賢堂。この書の養賢堂とは、仙台藩の藩校のことでしょうか。また、この外に養賢堂版にはどのようなものがありますか。

答 この書を刊行した養賢堂とは、仙台藩の藩校養賢堂のことです。

仙台藩の第5代伊達吉村は、家臣の子弟教育のため、儒員高橋玉斎の建議を容れて、元文元年〔1736〕6月15日、北三番丁細横丁西南角に学問所を設立し、玉斎を主立〔おもだち〕として11月1日開校しました。これが藩校養賢堂の前身です。しかし、学問所は年を経るにつれ衰微してきたので、これを憂えた7代重村が、校地を北一番丁勾当台通〔戦後の宮城図書館跡〕に移し、校舎を新築して教育内容の刷新をはかった⁽²⁾ので、再び学問興隆の気運を見るに至りました。安永元年〔1772〕7月11日、学問所を養賢堂と称することになりました。安永9年〔1780〕6月21日、学頭職を置くこととし、田辺楽斎〔らくさい〕を初代学頭に任じ、大いに人材養成に努めました。⁽³⁾文化7年〔1810〕10月28日、大槻平泉が学頭に任ぜられると、学制改革と校舎拡張とを断行し⁽⁴⁾

ました。この時の大講堂建設の構想については、文政元年〔1818〕に平泉が著した「講堂小誌」に詳述してあります。更に剣槍道場・柔術道場を付設して、武道教練の場をも兼ね備えました。その後、大槻習斎の学頭時代、嘉永5年〔1852〕養賢堂の支校として川内に「振徳館」(小学校)も設置して、門閥子弟の講学所としました。また剣槍道場傍に「日講所」を設けて、庶民教育をも行いました。養賢堂は規模広大で、全国藩校中屈指のものと称せられ、多くの人材を育成しました。戊辰の戦時体制に入ると学校機能はストップし、やがて慶応4年春、官軍の屯所となったので、北一番丁細横丁東北角旧北町奉行所に移され、有名無実に近いものとなっていました。翌明治2年10月16日知学局と改称され、翌3年養賢堂の名に復したものの翌4年廃藩置県で廃止されました。

養賢堂では、「仙台府学読本」と称する学生教科書用の漢籍を、教官が訓点・校訂するなどして翻刻発行しました。いわゆる養賢堂版と称せられるもので、上の「韻府一隅」のほか、次のようなものがあります。

- 訂正四書(宋、朱熹集註) 文化4年刊 10冊
- 訂正五経(田辺匡勅訂) 文化5年刊 11冊
- 西銘(宋、張載著朱熹解大槻清準訓点) 文化8年刊 1冊
- 大極図説(宋、周敦頤著朱熹解大槻清準訓点) 文化8年刊 1冊
- 孝経刊誤(宋、朱熹著大槻清準訓点) 文化8年刊 1冊
- 通書(宋、周敦頤著朱熹解大槻清準校訂) 文化9年刊 1冊
- 小学本註(宋、朱熹著) 2冊
- 白鹿洞書院揭示 刊 1冊

また、教科書以外の出版物として、次のものがあります。

- 秒度定刻範(村田尺蠖子著) 安政5年刊 1冊
- 開成丸帰帆図 安政5年刊 1枚
- 古事記正文(大安萬侶奉勅撰佐々木守信校) 慶応3年刊 3冊

なお、「仙台市史」第1巻に『藩校養賢堂の刊行物……などは総て伊勢半〔裳華房伊勢屋(または白木)半右衛門、通称伊勢半〕の蔵版するところとなっている。』とあり、養賢堂版の版木類は後に伊勢半から船岡の飯淵七三郎→仙台叢書刊行会→松島の大宮司雅之輔へと伝わったが、大宮司雅之輔はこれを瑞巖寺の倉庫に寄託しました。⁽⁶⁾

注(1) 儒者。諱は以敬〔「東藩史稿」に以敬を字としているのは誤〕、通称与右衛門、玉斎と号した。遊佐木斎に学び諸子百家を究めた。藩の儒員を命ぜられ侍講を兼ねた。学問所設立のことに力を尽した。宝暦10年〔1760〕3月15日歿、78才、越路瑞鳳寺に葬る。長子周斎、次子容斎いずれも儒者として有名であった。

注(2) 6代伊達宗村の第2子として寛保2年〔1742〕仙台に生れた。幼名儀八郎といい、延享4年〔1747〕9月21日世子となり藤次郎国村と名乗った。宝暦5年〔1755〕9月28日、

將軍の偏諱を受けて重村と改め、翌6年7月9日家督を継いだ。学問を好み、養賢堂を北一番丁勾当台通に移転、大いに教育の振興を図った。寛政2年〔1790〕6月13日病のため隠居、同8年〔1796〕4月23日歿、55才。大年寺に葬る。叡明院殿徹山玄機大居士と法諱す。

注(3) 儒者。諱は匡勅、字は子順、中洲と号し、通称は三郎助、晩年は楽斎と号した。本姓中野。田辺希文およびその子希元に学んだ。7代藩主重村が特に学資を給し、京都・江戸に留学した。天明8年〔1788〕、師希元の子希績〔まれつぐ〕に請われて師の姓田辺を名のり支族に準じた。人となり廉潔で、学力きわめて高く、著書も多く、養賢堂版の「訂正五経」のごとき彼の校訂に成るものであるが、国内第一の善本と称せられた。安永9年〔1780〕養賢堂初代学頭に挙げられた。文政6年〔1823〕4月27日歿、70才、連坊小路保寿寺に葬る。

注(4) 儒者。名は清準、字は子繩、通称民治、平泉また繩翁と号した。西磐井郡山ノ目村大肝入大槻清臣の弟。昌平校に入り、柴野・古賀・尾藤3先生に学び、学力を認められ舎長となった。博学多才、経済吏務にも精通し、藩の儒員に抜擢された。田辺楽斎の後任として、養賢堂第2代学頭に任せられた。学舎を拡張し、学制を刷新し、学頭たること40年の長きにわたり、藩の教学に力を尽した。現職のまま、嘉永3年〔1850〕1月17日歿、78才。山ノ目蘭梅山下に葬る。著書は、「鯨海游志」「漫遊秘録」「講堂小誌」「鯨史稿」養賢堂版の訓点書等数十種にのぼる。

注(5) 儒者。諱は清格、字は文礼、習斎と号し、格治と称した。平泉の子で、幼時家学を受けたが、後に昌平校に入り古賀侗庵に学んだ。また詩を梁川星巖に学ぶ。40才の時、父平泉の後をうけて養賢堂第3代学頭となった。内憂外患こどもも至る時局にかんがみ、支校を設け日講所を付設したほか、蘭学局を置きロシア語の教科をも加えた。習斎の学問はきわめて広くかつ深く、書画にも巧みで、その令名は父に劣らなかつた。慶応元年〔1865〕7月13日歿、55才。連坊小路保寿寺に葬ったが、のちに通町東昌寺に改葬した。仙台最初の洋式軍艦開成丸〔安政4年〔1857〕完成〕は、彼の建議に基き、軍艦製造御用係としての責任のもとに建造されたものである。

注(6) 「本食い蟲五拾年」(常盤雄五郎)に『これらの版木類は、今日となり有要なものも沢山あることであるから、何とかして再刷する計画があつて欲しい。徒らに腐朽に任せる法はあるまい。かかる版木の死蔵されている事や、其の由来を知る人も、今となつては殆どあるまい。恐らく当の瑞巖寺でも、この因縁は御存知なからう。或は知っているのは私だけであるかも知れない。』とある。

資料 本食い蟲五拾年(常盤雄五郎)

仙台市史第1、4巻

9. 伊達騒動（寛文事件）に関する図書資料

問 伊達騒動のことを書いた本には、どのようなものがありますか。

(1)

答 現在のところ、次のようなものがあります。

1. ノンフィクション資料

宮城県史第2巻

伊達騒動記（山路愛山）

伊達騒動実録（大槻文彦）

在田利見抄（鈴木春英、「仙台叢書」第4巻の内）

伊達氏実記伊達支傾録（日高誠実）

伊達安芸と寛文事件（浅倉寅雄）

先代萩の実相（田辺実明）

寛文事件の真相（佐藤 佐）

先代萩実話（斎藤荘次郎）

伊東七十郎（斎藤荘次郎）

伊達騒動（平 重道）

原田甲斐（林亮勝「日本人物史大系」第3巻の内）

伊達騒動と原田甲斐（小林清治）

伊達騒動・有馬猫騒動と村上刃傷事件―病跡学から見た―（王丸 勇）

伊達騒動（小林清治、「御家騒動」（北島正元編）の内）

英雄・天才秘話（王丸 勇）

英雄医談―病跡学こぼれ話―（王丸 勇）

お家騒動<その虚説と真実>（稲垣史生）

肯山公治家記録前編巻之7

2. フィクション資料

縦ノ木は残った（山本周五郎）

伊達騒動（海音寺潮五郎、「列藩騒動録」第1巻）